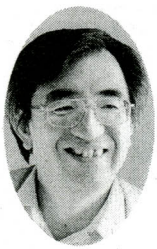
時評

世界史未履修問題

日本の未来に必要な知識

佐藤　洋一郎
（総合地球環境学研究所教授）



全国の高校で、必修科目のひとつである「世界史」を履修せず（させず）、場合によっては書類をごまかしてまで卒業するである。

学校は形だけでも補講してことを収めようとした。なかには「寝ていても、『内職』していてもよいから、補講に応じるように」と生徒に言った学校もあったようだ。文科省は、必要な補講時間数を減らすことも検討したという。新聞などによると、世論には「受験生の負担を軽く」というものが多かった。受験生の父母も、多くは「今さら補講は不公平」とか「子どもがかわいそう」など、首を傾げたくなるような反応を示した。

私はこれら最近の世の風潮はどうかしていると思う。この時期になって世界史の受講が損というのは、学ぶということを受験の手段としか考えない偏狭な見方だ。受験科目が日本史や地理であるとしても、世界史を理解することでそれらの理解は深まるはずだ。反対に、地理がわからず歴史が深く理解できるはずもない。全世界が激動する今の時代、世界の流れをその歴史を追って理解させることは、「国際社会への参加」をいうわが国として当然のことだろう。補講時数を短くしようとする文科省や県教委の対応も、妙に世論に媚びた感じで好感をもてなかった。

個人的経験を語るのを許していただくなら、私は若いころ遺伝学をやり、その後、稲作文化の歴史やその伝播に興味を持つようになった。さらに今はユーラシアの農業のおこりを調べるプロジェクトを動かしている。こうなると、必要な知識は地理とか世界史などという「科目」の枠内にとどまらない。いや、理系、文系などという枠さえも通用しない。従来の知識の枠が通用しない状況は、学問の世界だけではなく、いまや世界をまたにかけて仕事をしている人なら誰もが感じていることだ。国外のどこにいても、その国の国勢や歴史を知るのとそうでないのとでは、仕事の質が変わってくる。相手をよく理解すれば、友達もでき仕事もうまく行くことが多い。反対に不用意な発言が現地の人びとを傷つけ無用の対立を招くこともある。文化や歴史の違いに対する無知、無関心のなせる業だ。学ぶことを受験の道具としか考えない風潮をこれ以上広めることは、日本の未来を危うくすると私は思う。

執筆者略歴

さとう・よういちろう氏　京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2003年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」（角川書店）「DNA考古学のすすめ」（丸善ライブラリー）など。